

平成 26 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

I. 事業要旨

このプログラムの目的は、行動障害がある自閉症の方に対して効果的な支援を実施している市内の福祉サービス事業所の取り組みを、市内の福祉サービス事業所や特別支援学校職員が学び、各現場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することである。そこで、市内の三つの事業所に依頼し、実践報告及びパネルディスカッションを行った。研修会申し込みは 84 名、当日参加は 69 名であった。研修会当日と 3 ヶ月後の事後アンケート調査を行い、この研修会で学んだ内容を、どのように各現場に取り入れているか測定した。研修会直後のアンケート回収数は 65 であり、回収率は 94%であった。実践報告の取り組みについて、97%が「参考になった」、82%が「現場に取り入れてみようと思う」と回答している。3 ヶ月後の事後アンケート調査は、配布数 69、回収数 35、回収率 51%であった。その結果、学校や事業所の中で「取り組んだ」が 17%、「少し取り組んだ」が 17%あり、回答者の 34%がこの研修会後に、参考になった取り組みを実施していることが分かった。実際に取り入れている内容は、「利用者への直接支援」としては、「構造化」「視覚的支援」「シンプルに伝える」「褒める」「利用者の強みに着目する」「成功体験を増やす」「個人に合った支援の工夫」等であった。「職員体制」では、「丁寧なアセスメントを基に目標設定をする」ことや「職員の意識の向上」等があった。「その他」として、「家族との交換ノート」の取り組みや実践発表した事業所へ見学したことが分かった。

回答者の 61%が研修会で学んだ内容をあまり実践しておらず、その理由として、今回の実践報告の事例と回答者の現場が異なっていることや、物理的・人的な環境調整が難しいこと、職員の知識不足や未経験等があがっていた。事後アンケート調査結果では、このような実践的な研修会を望む声が多くあったため、今後も研修会を継続することが必要である。また、研修会に参加した一部の職員だけが事業所で取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、発達障害者支援センターの役割として、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。

II. 事業目的

行動障害がある自閉症の方に対して効果的な支援を実施している市内の福祉サービス事業所の取り組みを、市内の教育関係者及び福祉サービス事業所職員対象に研修会を開催し、報告する。成人期の参考になる事例を知り、支援手法を現場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することを目的とする。

Ⅲ. 事業の実施内容

年度当初は市内の4つの知的障害の特別支援学校教員全員を対象として、行動障害の方たちに対して効果的な支援を行っている福祉サービス事業所の実践報告を行う予定であったが、年度途中からの研修計画依頼は難しかった。そのため今年度は、市内の特別支援学校・特別支援学級・福祉サービス事業所の職員対象に研修会を実施することとした。平成26年10月26日（日）に、3つの福祉サービス事業所の実践報告及びパネルディスカッションを行った。（資料2-1）

効果検証に関しては、研修会当日（資料2-2）と数か月後（資料2-3）にアンケート調査を実施した。

Ⅳ. 分析、考察

1. アンケート調査結果

① 研修会当日のアンケート調査結果

研修会参加者に研修終了直後、記入してもらった。研修会参加人数は69名、アンケート回収数は65、アンケート回収率は94%であった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表1に示す。

表1 所属機関についてお尋ねします

	特別支援学校 (小学部)	特別支援学校 (中学部)	特別支援学校 (高等部)	特別支援学校 (その他)	福祉サービス事業所	その他	合計
人数	0	1	1	1	59	3	65

アンケートの結果について、図1から図3に示す。

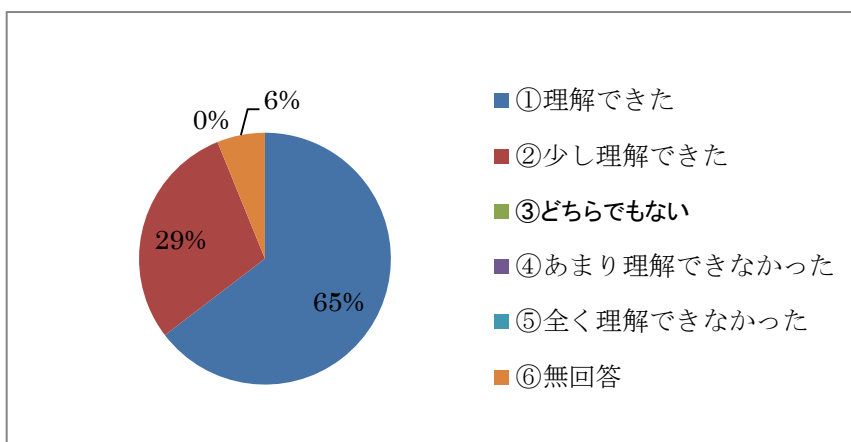


図1 「今日の研修会はいかがでしたか」について

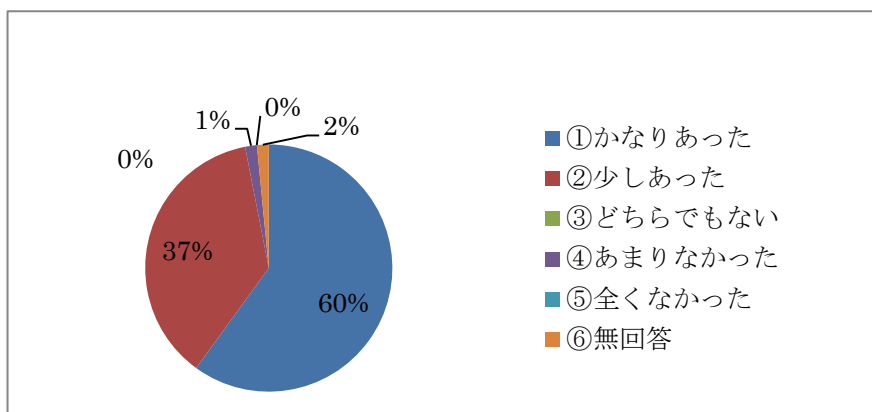


図2 「実践報告の中で、参考になった取り組みはありましたか」について

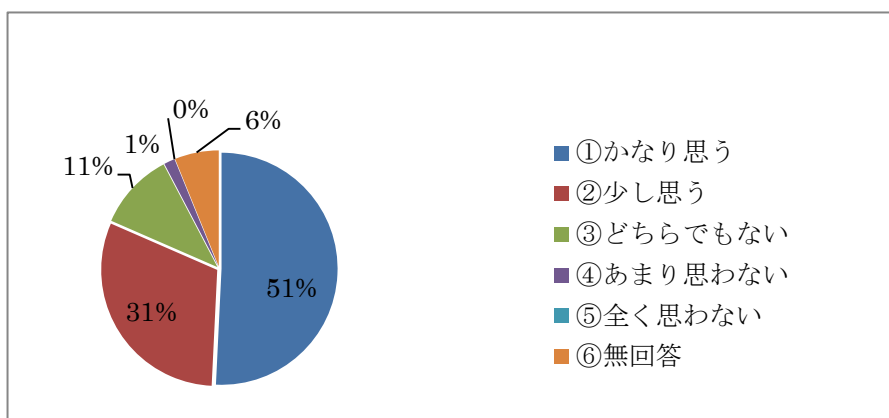


図3 「今回の成人期の実践を、学校や事業所に取り入れようと思いますか」について

図2の「実践報告の中で、参考になった取り組みはありましたか」の主な具体的な内容を以下に示す。

<参考になった取り組み>

- ・選択肢を用意して、本人に決定してもらうこと、自己選択、自己決定の大切さ。(5)
- ・「課題となる行動」と「強みと可能性に着目」したアプローチの両面のバランスが大切であること。(3)
- ・本人の強みを活かしての、成功体験。(4)
- ・相談できる安心感をもってもらうこと。
- ・認められる場所作り。(2)
- ・個別支援計画書は意見を書いた紙を貼りだし、みんなで作成していること。(11)
- ・関係機関が連携した支援体制が大切ということ。(5)
- ・コミュメモの使用。(6)
- ・エントリーシート。(4)
- ・本人の年齢に関係なく、本人をよく見てどこにアプローチするか見つ

けること。

- ・問題行動（課題となる行動）への、対処方法。
- ・視覚的支援での、明確な伝え方。（４）
- ・隙間の時間について、事前に対策を本人と考えていること。
- ・構造化がしっかり行われているところ。（２）
- ・ABC分析やTEACCH、PECS。
- ・ソーシャルストーリー。（３）

図3「今回の成人期の実践を、学校や事業所に取り入れようと思いますか」の主な具体的な内容を以下に示す。

- ・関係機関との連携やケース会議。（４）
- ・支援計画の作成を、細かくチームとして考えていく。（４）
- ・個別支援計画書は意見を書いた紙を貼りだし、みんなで作成していること。（５）
- ・職員の情報共有をしっかりと、同じ方向に向かって支援する。（５）
- ・「目標設定時のBS手法」「2つのアプローチ」
- ・ニーズを通しつつ、本人との意思疎通を通して、表出的な表現が行えることが必要と感じる。
- ・利用者の強みを伸ばす支援。（４）
- ・利用者本人だけではなく、その背景（今までの体験、家族関係）を分かった上で行える支援を、共有して行う。
- ・自己選択、自己決定の場を増やしていくこと。（７）
- ・スケジュールを1日だけではなく、長い期間の提示もすること。（２）
- ・計画をしっかりと練り、順序立てて利用者にきちんと伝えられる仕組み。
- ・コミュメモ。（３）
- ・交換ノート。
- ・エントリーシート。（２）
- ・構造化。（３）
- ・ソーシャルストーリー。（３）
- ・自閉症の特性を生かした徹底的な視覚支援。（２）
- ・文で書き、聞いたり、理解したりしてもらおう。（４）
- ・他害行為の時などのデータ記録の大切さ。（３）
- ・課題となる行動へのアプローチの仕方。（３）

図1の結果から、65%が研修内容は「理解できた」、29%が「少し理解できた」と回答しており、94%の回答者が発表内容は概ね理解できたことが分かった。

図2の結果から、60%が参考になった取り組みが「かなりあった」、37%が「少しあった」と回答しているため、発表者以外の福祉サービス事業所や

特別支援学校で取り組むことができる内容があることが分かった。

図 3 の結果から、発表者の実践を自分の現場の中に取り入れようと、「かなり思う」が 51%、「少し思う」が 31%であったため、82%が発表内容の手法を自分の現場に取り入れようと考えていることが分かった。その一方で、「どちらでもない」が 11%、「あまり思わない」が 1%であった。「どちらでもない」と回答した参加者が直接支援に携わっていない場合もあったが、発表内容が「理解できた」「参考になった」と回答しているものの、自分の現場への取り入れは「どちらでもない」のは、今回の事例が自分の現場とかなり異なるのか、現場への取り入れ方が分からないのか等分析が必要である。

② 研修会から 3 ヶ月後のアンケート調査結果

研修会から 3 ヶ月後の平成 27 年 1 月下旬に、研修会参加者全員にアンケート調査票を送付した。アンケート調査機関は、平成 27 年 1 月 20 日から 2 月 13 日である。アンケート配布数 69、回収数 35 であり、回収率 51%であった。回収率が高いとはいえなかったため、参加者全員に再度依頼文を送り、アンケート締め切り日を 3 月 10 日まで延長したが、その後の回答はなかった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表 2 に示す。

表 2 所属機関について

	特別支援学校	福祉サービス事業所	その他	無回答	合計
人数	2	29	3	1	35

アンケートの結果について、図 4 に示す。

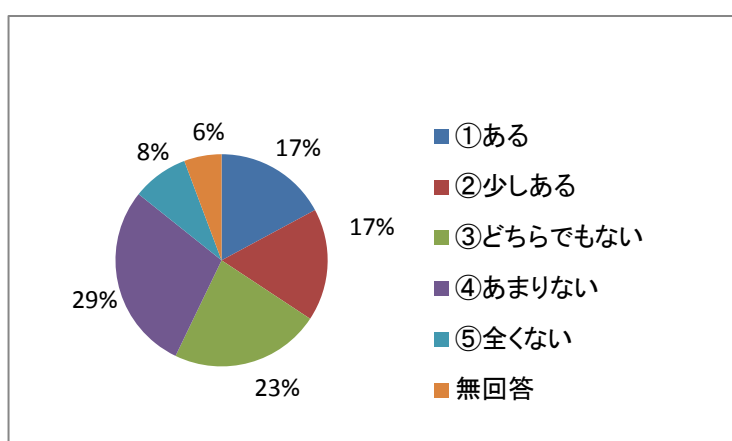


図 4 前回の研修会を参考にして、学校や事業所の中で取り組んだ内容がありますか。

図 4 の結果から、学校や事業所の中で「取り組んだ」が 17%、「少し取

り組んだ」が 17%あり、回答者の 34%の参加者が、この研修会後に参考になった取り組みを実施していることが分かった。その具体的な取り組みの内容を以下に示す。

＜学校や事業所の中で取り組んだ内容が「ある・少しある」の回答者の主な内容＞

- ・主に経験のない支援員が、新しく自立課題を作成した。研修で学んだ事を活かし、作成手順のアドバイスをした。
- ・今ある事業の作業に当てはめるのではなく、利用者ごとにその人に合った作業を出来るだけ探して、やりがいや達成感を感じられるように、今まで以上に準備や手順を工夫している。
- ・自信のない利用者に対して、多くの機会を作り成功体験を繰り返すことで、目標に近づけるようにしている。
- ・スケジュール管理を徹底するために、家族にも協力を依頼し、交換ノート（スケジュールチェックリスト）を行っている。
- ・担当の利用者で就労が難しい方のため、進路先として桑の実工房を見学させてもらった。
- ・今までは一緒に行って見て覚えてもらおうとしたり、口頭もしくは文章での指示・指導を行っていたが、この研修で学んだ、その人のレベルよりも1つ下に下ろして、必ず出来る方法を考えていけるようになった。指示書にも、短文や写真を入れる工夫ができるようになった。
- ・当事業者が発表させていただいたので、継続している。本人の強み、長所にアプローチしていくことを改めて必要だと感じ、意識して支援している。
- ・個人個人にあった支援の方法を色々試しながら、よい方法を見つけ出すようにしている。
- ・個別構造化の工夫と実践。
- ・より掘り下げて、すべてのツールを使うよう努力していく気持ちに職員全体がなった。
- ・ニーズアセスメントをしっかりと引き出し、本人の本質をまとめや整理をしていく中で目標設定を提示している。本人が楽しく生活や仕事ができるように、本人に合わせた構造化やツール使い、支援している。
- ・自閉症と診断されていなくても、統合失調症で自閉気味と思われる相談者がいる。視覚に訴える、伝えるときはシンプルに、出来たことを褒めるなどに試みている。

図4の結果から、学校や事業所の中で取り組んだ内容が、「どちらでもない」が 23%、「あまりない」が 29%、「全くない」が 9%であり、回答者の 61%であった。その具体的な理由を以下に示す。

<学校や事業所の中で取り組んだ内容が「どちらでもない・あまりない・全くない」の回答者の主な内容>

- ・取り入れる前の段階として、利用者の行動のベースがまだ取れていない。
- ・対象者が事例とは異なるため合わないと思った。しかし取り組みは参考になったので、応用したい。
- ・対象者が重症心身障害者のため、取り入れることが難しかった。問題や課題に向けてのブレインストーミングやチームアプローチの手法は今後取り入れていきたい。(2)
- ・発達障害の方への支援に直接関わっていないため(2)。
- ・職員全員で個別支援会議に33週間かけるほどの手間は、在学時間が限られているので全く同様には無理だが、そのスタンスには大いに学ぶ所があると感じた。
- ・支援員数が多いため、支援を統一する事が難しい。
- ・個人的に有意義な研修だったが、事業所に持ち帰り、提案や取り入れてもらう環境が整わなかった。より多くの支援者と共に研修に参加し、意識を持ち共有する大切さを感じた。
- ・研修は大いに参考になったが、持ち帰って実施するには、具体的な支援内容がもう少しあればと感じた。また、皆が同じ思いで支援が出来るよう、全職員への指導(学習)をする必要があると思った。
- ・自閉症の支援に対して、知識が少ないため、今後出来ることがあれば取り入れたい。
- ・当事者が頑なに拒む事が多く、支援の難しさを感じた。

また、事後アンケート調査の項目「今後希望する研修や講師がありましたらお書きください」の主な記述を以下に示す。

- ・初歩的な発達障害領域の研修。
- ・知的な遅れのない発達障害の成人の就労支援や生活支援に関する研修。
- ・統合失調症と発達障害を併せ持つ人への支援について。
- ・事例発表や取り組み内容も参考になったので、継続してほしい。(2)
- ・他施設と情報交換が出来る研修。
- ・作業分析と手順書、行動分析について。

<その他>

- ・この研修だけでなく、何回かの研修に参加した職員は、通所者への対応が少しずつ変わったように思う。
- ・時間が短いように感じた。
- ・具体例が非常に多く、実践的な研修だった。また参加したい。

研修会の事後アンケート調査結果から、研修会での実践報告を参考にして、自分の現場で実践していたのは回答者の34%であり、高い数値とはいえな

い。しかし、この研修会に参加することによって、アセスメントの重要性を認識したり、より個別的で本人に合った支援の工夫や、家族との協力体制を強化する等の実践の回答があった。また、あまり実践していないという回答者であっても、今後取り入れていきたいという意見も複数あった。また、あまり実践していない理由として、今回の実践報告の事例と回答者の現場が異なっている場合や、物理的・人的な環境調整が難しいこと、職員の知識不足や未経験等があがっていた。

2. 考察

表3は、研修会当日アンケート調査項目「今回の成人期の実践を、学校や事業所に取り入れようと思いますか」の具体的な内容と、事後アンケート調査項目で、学校や事業所の中で取り組んだ内容が「ある・少しある」の回答者の主な内容を「本人への直接支援」「職員体制」「その他」にまとめたものである。

表3 実践報告を参考にして自分の現場に取り入れる内容

	当日アンケート	事後アンケート
本人への直接支援	<ul style="list-style-type: none"> ・本人との意思疎通を通して、表出的な表現が行えるようにする。 ・利用者の強みを伸ばす支援。 ・自己選択、自己決定の場を増やしていく。 ・スケジュールを1日だけではなく、長い期間の提示もすること。 ・コミュメモ ・交換ノート ・エントリーシート ・構造化 ・ソーシャルストーリー ・課題となる行動へのアプローチの仕方。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今ある事業所の作業に当てはめるのではなく、利用者に合った作業を出来るだけ探して、やりがいや達成感を感じられるように、今まで以上に準備や手順を工夫している。 ・自信のない利用者に対して、多くの機会を作り成功体験を繰り返すことで、目標に近づけるようにしている ・この研修で学んだ、その人のレベルよりも1つ下に下ろして、必ず出来る方法を考えていけるようになった。指示書にも、短文や写真を入れる工夫ができるようになった。 ・本人の強み、長所にアプローチしていくことを改めて必要だと感じ、意識して支援している。 ・個人個人にあった支援の方法を色々試しながら、よい方法を見つけ出すようにしている。 ・個別構造化の工夫と実践。 ・自閉症と診断されていなくても、統合失調症で自閉気味と思われる相談者がいる。視覚に訴える、伝えるときはシン

		ブルに、出来たことを褒めるなどを試みている。
職員体制	<ul style="list-style-type: none"> ・ケース会議 ・支援計画の作成を、細かくチームとして考える。 ・個別支援計画書は、皆で意見を書いた紙を貼りだして作成する。 ・計画をしっかりと練り、順序立てて利用者నికిちんと伝えられる仕組み。 ・他害行為の時などのデータ記録の大切さ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・経験のない支援員が作成した自立課題に、研修で学んだ事を活かし、作成手順のアドバイスをした。 ・職員全員が、より掘り下げて、すべてのツールを使うよう努力していく気持ちになった。 ・ニーズアセスメントをしっかりと引き出し、本人の本質をまとめや整理をしていく中で目標設定を提示している。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関との連携 ・家族関係や本人の今までの体験を理解した上で行える支援を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュール管理を徹底するために、家族にも協力を依頼し、交換ノート（スケジュールチェックリスト）を行っている。 ・就労が難しい利用者の進路先として発表事業所を見学した。

表3の結果から、自分の現場に取り入れたい内容の「本人への直接支援」は、当日アンケート調査では、「構造化」「自己選択・自己決定の場」「コミュメモ」「エントリーシート」「利用者の強みを伸ばす支援」「行動へのアプローチ」等であった。事後アンケート調査で実際に取り入れている内容は、「構造化」「視覚的支援」「シンプルに伝える」「褒める」「利用者の強みに着目する」「成功体験を増やす」「個人に合った支援の工夫」等であった。

自分の現場に取り入れたい内容の「職員体制」は、当日アンケート調査では、「個別支援計画は皆で意見を書いた紙を貼りだして作成する」「データ記録の大切さ」等であり、事後アンケート調査では、「丁寧なアセスメントを基に目標設定をする」ことや「職員の意識の向上」等があった。

自分の現場に取り入れたい内容の「その他」として、当日アンケート調査は、「関係機関との連携」や「本人の背景に対する理解」であった。事後アンケート調査では、「家族との交換ノート」の取り組みや実践発表した事業所へ見学したことが分かった。

当日及び事後アンケート調査結果より、当日アンケートで「取り入れたい内容」と研修会後に実践している内容は、一致する部分が多かった。具体的には、「構造化」「利用者の強みに着目する」であった。この2つがあがっている理由として、北九州市発達障害者支援センターが「構造化セミナー」や「応用行動分析研修会」「実践報告会」等の研修会を長年にわたって開催していることが考えられる。反面、当日アンケート調査では「コミュメモ」や「ソーシャルストーリー」があがっているが、事後アンケート調査ではその記述はなかった。

その理由としては、実際に現場に取り入れる際は、その手法に関する研修の必要性があるためだと考えられる。また、研修会に参加したことを契機に、アセスメントの重要性や職員意識の向上、家族との連携を認識し、一部取り入れたり、取り入れようと努力している様子が伺われた。

しかし、回答者の61%が研修会で学んだ内容を実践しておらず、その理由として、今回の実践報告の事例と回答者の現場が異なっていることや、物理的・人的な環境調整が難しいこと、職員の知識不足や未経験等があがっていた。その背景には、市内の事業所や職員の経験や環境によって、行動障害がある自閉症者への理解や対応には、かなり温度差があることが考えられる。事後アンケート調査結果では、このような実践的な研修会を望む声が多くあったため、今後も実践報告や事例検討等研修会を継続することが必要と考える。また、研修会に参加した一部の職員だけが取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。加えて、「発達障害者支援のための初級セミナー」や「構造化セミナー」、「実践報告会」等各種研修会を促進し、市内全体のスキルアップを目指したい。